

心のいたみ

林田 幸子

上鷲宮五丁目

当時四歳になったばかりの私には、多くの記憶はありませんが、被爆五〇周年を迎えるに当り、これまであまり話してこなかった被爆当日の模様や、成長過程での、今なお忘れられない、強く記憶に残っているいくつかを書いてみようと思います。

私は長崎の浦上カトリック教会の近くに、親子五人で幸せに暮らしていました。

運命の昭和二〇年八月九日は、私達家族は母が下の弟を出産したので、母の実家に皆でお世話になっておりました。私と弟、それに実家の従姉の三人は、その時広い家の中を思い切り走り回ったり、かくれんぼをしたり、遊びに夢中で母や祖母達は暑い太陽の下、着物の虫干しなど、それぞれに仕事をしていました。

それは、アツと言う間の出来事で、気が付くと私は、押しつぶされた家の下敷になっておりました。なんとか小さい隙き間を見つけて表へ出て見ると、先程までの真夏の暑い太陽は無く、灰色の雲が、小さい私の手にも届きそうな所まで低くたちこめ、

まるで夜のようでした。

自分の家だけではなく、周りの家々も同じようにつぶれており、見る影も無く恐ろしい光景でした。

つぶれた家の下から「誰か助けを呼んで来て」と繰り返し、繰り返して、聞こえてきませんが、恐ろしい光景の中を、何処へ行けば良いのか、私はただおろおろと、その場を回って泣いていることしか出来ませんでした。

やがて、祖母や伯母達も助け出されましたが、身体中にガラスの破片が刺り、血まみれの姿でした、

小さなガラスの破片は、体中を動き回るらしく、その後、長い年月をかけて体の中から取り出されました。

外で虫干しをしていた母は、爆風に当たり即死。一緒に遊んでいた元気一杯の弟も可愛想に即死でした。

生まれたばかりの弟は、落ちてきた大時計の中にスッポリ入って、奇跡的に傷一つ無く助かっておりました。「お母さんは、死んだんだよ。良く見ておきなさい」と祖母が教えてくれました

だが、白く美しい母の顔は、まるでねむっているようで、死んでいるとは思えなかったことが、今もはっきり思い出せます。

あの時の私は、母の死がこれから先の私の人生に、どれ程悲しく辛い事になるのかわかるはずもなく、急に変わってしまった自分の周りの出来事の方が恐ろしくて、母の死を考える余裕はなかったと思います。

原爆落下後は住む家も無く、私達はしばらく防空壕の中で生活していましたが、その前の空地では、焼けただれ、身元もわからなくなった多くの人達が、壊れた家の柱など高く積み上げた中で、茶毘に付されてゆきました。

高く燃え上がる炎と、鼻を突く臭い、私の母と弟も私の目の前で高く昇る炎の中に消えてゆきました。

火葬をしている防空壕の前の道には、照りつける太陽の下、焼け爛れながらも、まだ命の有る人達がゴロゴロと寝かされており、生きている人達なのに、その体には、蛆虫がわき、体中を這い回り、「水を下さい」「水を下さい」と道ゆく人に、力なく切なく呼びかけていました。どんなに辛く苦しかったことでしょう。

あの人達も、きっと私の弟や同じように、間も無く天に召されたのでしょ。

当時四歳の私には、その痛みや、苦しみはわかりませんでした。だが、あの日の悲惨な光景は、目の前で起きた忘れることの出

来ない事実として、はっきり頭に残っております。

父は、会社へ行ったきり、帰って来ることはありませんでした。

一度に多勢の人達を亡くしてしまった三菱製鋼所では、誰が誰だかわからない状態で、父のお骨も誰のものかわかりませんが、少し頂きお墓に納めてあると聞いております。

父の死を自分の目で確かめていない私は、長い間、父だけは必ずどこかに生きていて、私の所へ帰って来てくれると、淋しい時や夕暮れ時など心待ちしていたものです。

奇跡的に助かった生まれればかりの弟でしたが、母の死によってお乳がもらえず、食べる物など何も無かった時だったため叔母達があちらこちら走り回って、わずかばかりの米の汁を飲ませてくれましたが、やがて栄養失調になり、やせ細り、消えるように死んでゆきました。

わずか百日の命でした。弟もきっと生きようと一生懸命頑張ったと思います。

せめて、弟だけでも、生きていてくれたら、どんなにか心強かったかと思うと残念でなりません。

泣き虫の私を何時もやさしく見守ってくれた母、笑顔のステキな父、姉の私を泣かしていた元気一杯の弟、生まれたばかりの可愛い弟、私一人をおいて皆死んでしまいました。とうとう私は、四歳で一人になってしまいました。

両親や弟との楽しかった思い出も、ほんのわずかではありませんが、私が生きてゆく上での心の支えとして、今も大事に残っています。

月日が過ぎて、物事が良く理解出来るようになるにつれ、一人であることの淋しき、悔しさが大きく心を占めるようになり、どうして私一人生き残ったのか、胸の苦しい日が続くようになりました。

生き残った私をどうするか？ 母の実家で引き取るか、父方の親戚で引き取るか、と言うような話が耳に入る時など不安で、小さくても辛いと感じたものです。

戦後の住む家も、食べる物も、何も無く、自分一人が生きて行くのも大変な時、祖母の所でも、主人や子供達を一度に亡くし、女だけの生活の中で、私を引き取って育ててゆくのは大変なことだったろうと思います。

そんな苦しい生活の中で、私が淋しい思いをしないように気を遣い、従姉と分け隔てなく育ててもらったことに對し、今は本当に感謝の気持ちで一杯です。でも、小さい頃はどんなに可愛がって育ててもらっていても、両親が恋しくて、私には入ってゆけない従姉の母と子の関係を見るにつけ、羨うらやまやましく、それを見ながらの毎日の生活は少々辛いものがあり、淋しく感じました。

そんな時は必ず防空壕前の、白くやさしい母の顔を思い出し、

戦争さえなければと泣いて過ごした日も多かったように思います。

一人生き残ったことで悩み苦しんだこともたくさんありますが、小さいままで死んで行った弟達や、多くの子供達の無念さを思った時、今こうして生きていられることのスバラシサを実感し、これから先の人生をもっと意義あるものにして行かなければいけないと思います。

五十年間無事過ごして来られたのは、祖母や叔母達が温かく見守ってくれたからだと思えますし、全国の皆様方の温かい励ましの言葉があったからだと思えます。

今回、書くことよって、改めて戦争の悲惨さを思い起こすことができましたし、皆様にも少しでも戦争の恐ろしさをわかって頂き、二度とこのような不幸を繰り返さないよう、子供達の時代が明るく平和であるようお願いさせていただきます。